国際研究論叢　22（3）：79～91，2009

研究ノート

「高校生の問題行動の実態とその関連要因に関する探索的研究」

小　牧　一　裕*

Problem Behavior in High School Students

Kazuhiro Komaki*

Abstract

In order to establish the current state of delinquent behavior and investigate factors relevant to it, 388 hight school students comprising 191 females and 197 males were surveyed.

The major findings were that aggression and norm-consciousness influenced Problem behavior overall, with aggression and norm-consciousness factors in females; and aggression, norm-consciousness, and teacher support significant in males Solutions to the problem of delinquency are also discussed.

キーワード

高校生、問題行動、規範意識、攻撃性

１．問題

近年､わが国では青少年犯罪の凶悪化が社会的に大きな問題として取り上げられている。なかでも最近の青少年犯罪には、いわゆる問題視されている少年だけではなく、大人側からは問題がないと思われていた　、日常特に目立つことのない平凡な、いわゆる普通の青年たちによる事件が目立っている（清水・山崎、1988）。こうした現代の青少年にみられる問題行動の背景には、親の養育態度、規範意識の低下、攻撃的性格など多くの要因が関連すると推測される。

問題行動に関する研究で宮戸ら（2000）は、高校生の問題行動に対する意識として飲酒行動はいけないことではなく、日常的な行動となっていることを指摘している。

非行原因の観点からは、家族関係や友人関係といった人間関係、家族への挨拶や朝食を取るなどの生活関係、さらにクラスでの成績などの学校関係等と非行経験との関係を調べ

＊こまき　かずひろ：大阪国際大学人間科学部教授〈2008.12.12受理〉

た調査もある（総務庁、1999）。ただし、この調査ではクロス集計にとどまっている。また、友人の問題行動を止めるかどうかを聞いた研究もある（関口ら、2000）。

規範意識に関する研究で安藤（1990、1993）は、女子大学生および高校生の規範意識にはダブル・スタンダードが存在しており、同性に対してより厳しい規範行為の基準を持っていることを明らかにしている。さらにキレと規範意識については、小学生よりも中学生の方が規範意識が低く、男子よりも女子で「本人の自由だ」という脱規範的意識が強いことが示された（伊藤、2000）。

また、犯罪・非行に対する許容と攻撃性との関連について清水・山崎（1998）は、非行項目（乗物盗、飲酒、喫煙等）では攻撃性の低い群が高い群よりもより厳しい判断を下していると指摘している。

こうした研究をもとに、高校生の問題行動、攻撃性および規範意識についてその実態を把握し、問題行動と関連する要因を探索的に検討することが本研究の目的である。

２．方法

（１）調査協力者

兵庫県にある高校に在籍する生徒388名（男子生徒197名、女子生徒191名）。

平均年齢：男子生徒16.1歳、女子生徒16.5歳。学年：１年生169名、２年生97名、３年生124名。

（２）調査方法

調査は平成14年10月に行った。実施に際しては集団調査法を用いた。

（３）調査項目

調査項目は、問題行動、攻撃性、規範意識をはじめとして、これらに関連すると予想されるさまざまな項目からなる。ここでは本研究の分析に使用した項目についてのみ述べる。

①問題行動

高校生の問題行動の経験に関する項目は、宮戸ら（2000）、関口ら（2000）および犯罪白書などを参考に以下の10項目を設定した。

・校舎や設備の損壊　・喫煙　・飲酒　・恐喝　・自転車バイク等の窃盗
・万引き　・援助交際　・薬物　・暴行（ケンカは含めない）・ひったくり

それぞれの行為について、「したことがある」か「一度もない」の二者択一で選択させた。

本報告では、ある問題行動を経験したことがある場合を１点とし、それらの合計得点を問題行動得点とした。したがって、得点が高いほど問題行動を多く経験していることをあらわす。

②規範意識

上記の問題行動の経験に関する10項目について、どの程度その行為をしてはいけないと思うのかを尋ねた。各項目について、「全くそう思わない（１）」から「とてもそう思う（５）」までの５段階で評定するよう求めた。本報告では、得点が高いほど規範意識が高いことをあらわす。

③攻撃性（BAQ：Buss-Perry　Aggression　Questionnaire）

日本版BAQ（安藤ら、1999）は、情動的側面である「短気」、認知的側面である「敵意」、攻撃性の行動的側面である「身体的攻撃」および「言語的攻撃」という４つの下位尺度から構成される。「短気」は怒りの喚起されやすさを測定する尺度で、怒りっぽさや怒りの抑制の弱さを測定する項目である。「敵意」は他者に対する否定的な信念・態度を測定する尺度で猜疑心や不信感を測定する項目、「身体的攻撃」は暴力の正当化、暴力への衝動などを測定する項目、「言語的攻撃」は自己主張、議論好きなどを測定する項目で各６項目よりなる。本研究では因子分析の結果から、４つの下位尺度の「短気」の６項目（α=.77)、「敵意」の３項目（α=.73)、「身体的攻撃」の６項目（α=.81)、「言語的攻撃」の３項目（α=.67）を使用し、その合計得点を「攻撃性」とした。これらの項目について、「まったくあてはまらない（１)」から「非常によくあてはまる（５）」までの５段階で評定するよう求めた。

④ソーシャルサポート

ソーシャルサポートは、その人を取り巻く重要他者から得られるさまざまな形の援助を意味し、サポートが得られているという認知が精神的健康やモティベーションに影響することが知られている（小牧、1994)。今回はサポート源として「友達」、「親」、「先生」の３つを想定し、「あなたがお落ち込んでいると元気づけてくれる」、「普段からあなたの気持ちをよく理解してくれる」など５項目の合計を各サポート得点とした。各サポート項目について、「全くそう思わない（１)」から「とてもそう思う（５）」の５段階で評定するよう求めた。

⑤家庭のしつけおよび基本的生活習慣

しつけについては、「しつけの厳しさ」と「しつけの連続性」に関する２項目を設定した。

しつけの厳しさは、「自分の家庭のしつけは厳しい方である」という厳しさの認知に関する項目、しつけの連続性は、「親から受けたしつけを自分の子どもにもしつけたい」という項目で尋ねた。

また、しつけに関する客観性のあるデータとして「門限がある―なし」についても２件で尋ねた。

門限を除いた各項目は、「全くそう思わない（１)」から「とてもそう思う（５)」までの５段階で評定するよう求めた。

基本的生活習慣に関する項目は、朝食の習慣をひとつの基準とした。「朝食はほとんどとったことがない（反転)」など２項目の合計得点を基本的生活習慣の「朝食をとる」得点とした。門限を除いた各項目は、「全くそう思わない（１)」から「とてもそう思う（５)」までの５段階で評定するよう求めた。

⑥フェイスシート

性別、学年、年齢の他に、祖父母との同居（している-していない）について尋ねた。

３．結果

高校生の問題行動

図１は高校生の問題行動の経験を比率で表したものである。10項目中、半数以上の生徒が経験しているのは飲酒の経験率で６割を超える経験率（61.0％）となり、他の問題行動と比較して高い。続いて喫煙30.4%，万引き29.4%，校舎や設備の損壊27.6%となっており、この３つは３割前後とほぼ同じ程度の経験率であった。

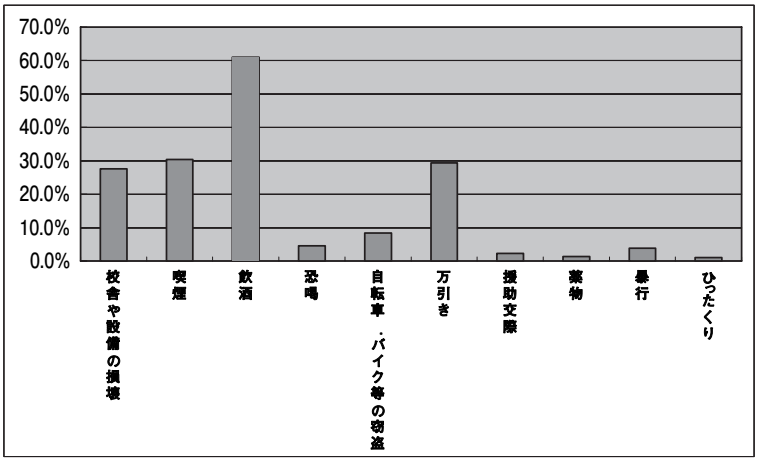

図１　高校生の問題行動（全体）

図２は高校生の問題行動の経験率を男女別にあらわしたものである。飲酒（男子；61.5%，女子；63.9%）ではやや女子の比率が高かったものの、万引き（男子；38.3%，女子；21.5%）、喫煙（男子；36.3%，女子；26.2%）、校舎や設備の損壊（男子；36.5%，女子；20.5%）と、ほぼ全般的に男子生徒の経験率が高い傾向にあった。

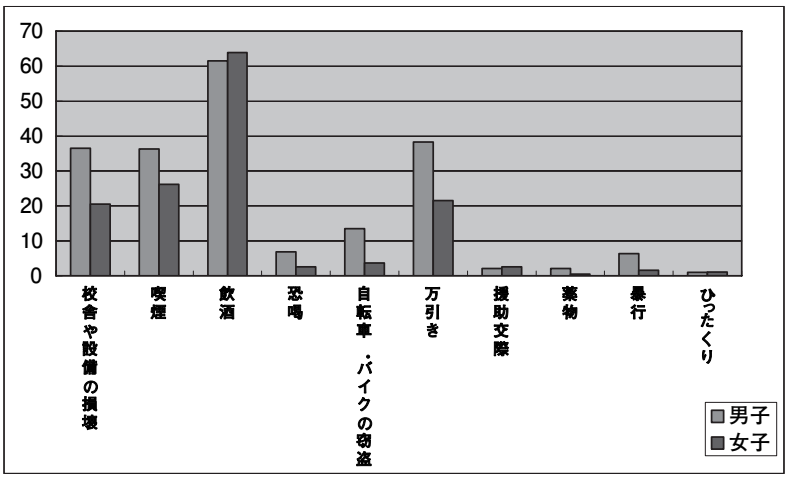

図２　高校生の問題行動（男女比較）

高校生の攻撃性

図３は、高校生の攻撃性について、男女別に下位次元ごとに平均値を比較したものである。全体では攻撃性のそれぞれの平均値の値は、短気18.6点、敵意13.1点、身体的攻撃性19.8点、言語的攻撃性11.9点、攻撃性63.4点となっている。男女別に平均値を見ると、短気（男子:$\overline{X}$=18.2，女子:$\overline{X}$=19.1）、 敵意（男子；$\overline{X}$=12.7，女子；$\overline{X}$=13.6）、身体的攻撃性（男子；$\overline{X}$=20.3，女子；$\overline{X}$=19.3）、言語的攻撃性（男子；$\overline{X}$=12.2，女子；$\overline{X}$=11.6）で、短気（t＝2.03,P<.05）と敵意（t＝3.07,P<.01）と言語的攻撃性（t＝2.07,P<.05）の尺度で有意な差がみられ、そのうち短気と敵意は女子生徒のほうが男子生徒よりもやや高い傾向にあった。攻撃性の総得点（男子；$\overline{X}$=63.3，女子；$\overline{X}$=63.5）では、男子生徒と女子生徒の差は見られなかった。

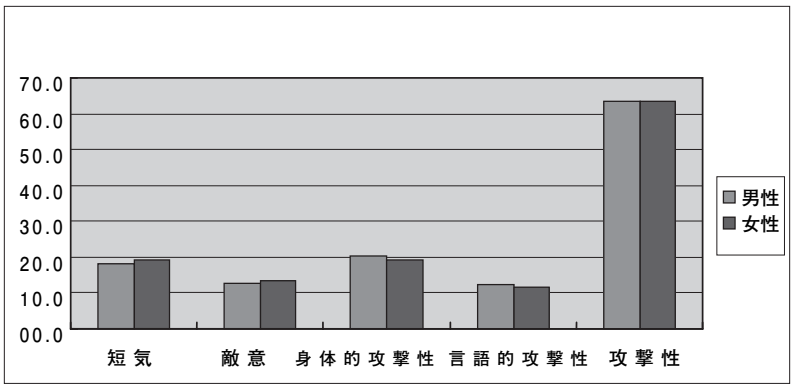

図３　高校生の攻撃性（男女比較）

高校生の規範意識

図４は高校生の問題行動に対する「やってはいけない」と思う比率（＝規範意識）を表したものである。多いものから順に、薬物85.8％、ひったくり85.6％、万引き82.3％の順に規範意識は高かった。規範意識の低い問題行動としては、飲酒45.0％、喫煙59.5％、援助交際69.1％となっており、喫煙と飲酒は他の項目より規範意識が低い。この２項目については20歳以上であれば法律で許されていることからやってもよいという意識が強くあると考えられる。しかし、援助交際（69.1%）については約３割がやってはいけないとは思っていないわけで、将来許される飲酒、喫煙の理由とは分けて考える必要がある。

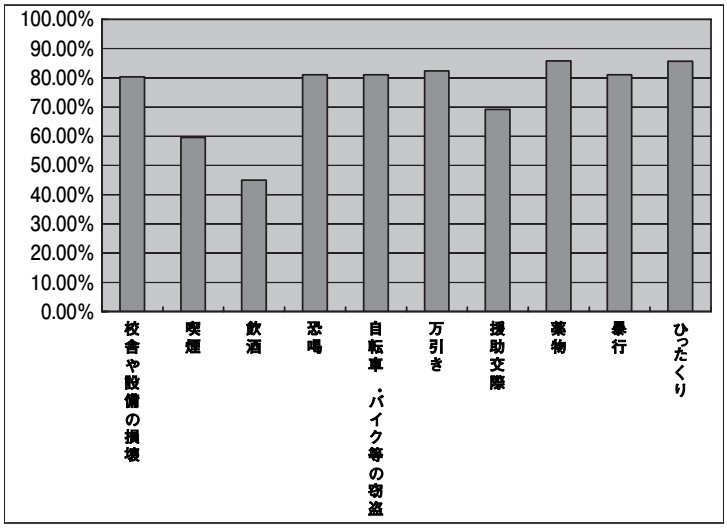

図４　高校生の規範意識（全体）

図５は、 高校生の問題行動に対する許容度（「やってもよい」と思っている）を男女別に比率で表したものである。校舎や設備の損壊（男子；8.3%, 女子；4.1%）では男子生徒が、飲酒（男子；27.1%, 女子；33.5%）では女子生徒が高い傾向にあった。問題行動と規範意識との関係から考えると、万引きをはじめとしてやってはいけないという規範意識を比較的多く持っているものの、実際の行動レベルでは３割程度の生徒が問題行動をおこしていることを示している。

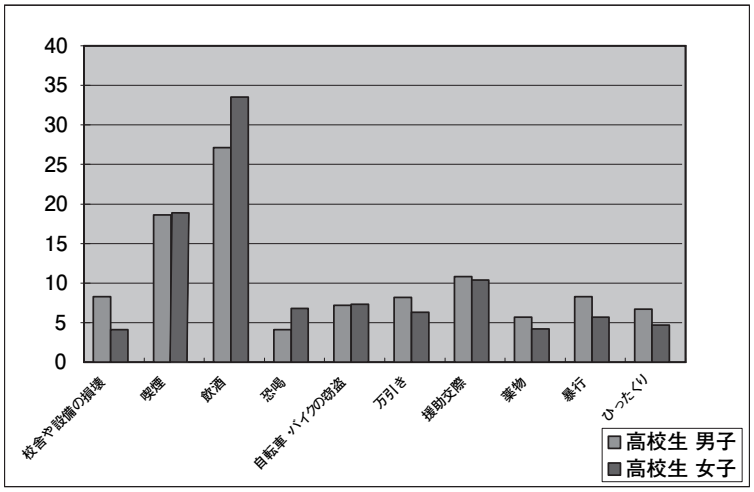

図５　高校生の規範意識（男女比較）

サポートについて

図６は、友人のサポートの比率、図７は、親のサポート比率、図８は先生のサポート比率である。

単純集計結果から、サポートがあるところの３つの中で友人47.9%、親31.8%、先生11.3%となっており、先生のサポートがあると認知している比率が最も低かった。ただし、サポート得点の高さと効果は必ずしも一致するわけではない。みんながサポートしてくれて当たり前だと思っている生徒にとっては、その効果が薄れることもある。

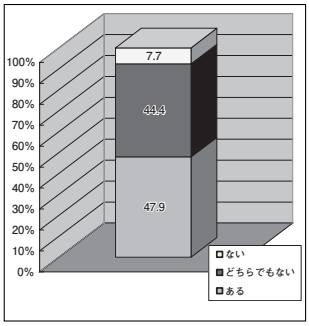

図６ 友人のサポート

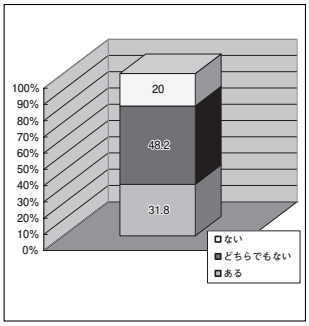

図７ 親のサポート

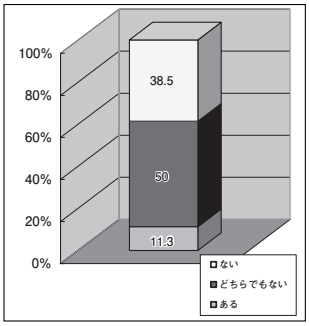

図８ 先生のサポート

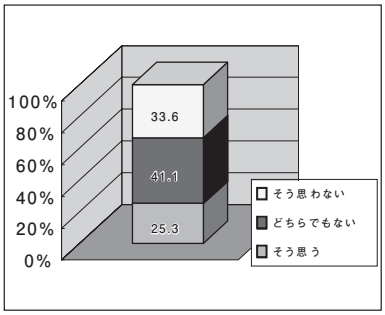

図９ しつけの厳しさ

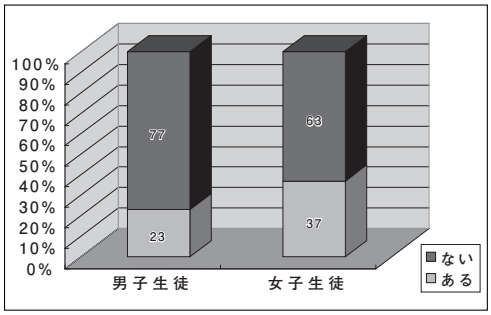

図10 門限のある・なし

しつけと基本的生活習慣について

図９は、自分の家庭のしつけについて厳しい方であったかどうかを尋ねた結果である。しつけが厳しかったと思っている生徒は全体の約４分の１（25.3%）である。また、親から受けたしつけを自分の子どもにもしつけたいと思っている生徒は全体の約２割（19.1%）となっている。

図10は、「門限のある-なし」を性別にみた結果である。男子生徒では77%、女子生徒でも63%が門限はないと回答している。しつけに関する結果を考え合わせると、親は子供に対してかなり甘く接しているが、それについて子どもはそれほど高く評価していないようである。

問題行動のレベルとその関連要因

次に、問題行動のレベルによる分析を行った。問題行動の経験によって全体をいくつかの群に分けるため、今まで問題行動を一度も経験したことがない人およびひとつだけ経験したことがある人（たとえば飲酒など）を「まじめ群」(N=217）とした。そして、喫煙、万引き、校舎や設備の損壊、自転車の窃盗など２つから４つまで経験したことがある生徒たちを「問題行動予備群」(N=145)、５つ以上経験したことがある生徒たちを「問題行動群」(N=27）とした。男子生徒では３群それぞれ（N=93,N=81,N=22）を全体と同基準にしたが、女子生徒では「まじめ群」(N=123）は同基準で、「問題行動予備群」(N=50）は３つまでの経験で、４つ以上経験した生徒たちを問題行動群（N=18）とした。問題行動の各群と他の変数との関連を調べるため、一要因の分散分析を行い、次にTukey法による多重比較を行った。ここでは、有意な差（５％水準）が認められたものを中心に示す。

まず全体で見られた結果である。分散分析の結果、群間の得点差が有意であったのは、攻撃性（F（2,386）＝13.76,P<.001)、規範意識（F（2,386）＝22.23,P<.001)、先生のサポート（F（2,386）＝7.41,P<.001)、朝食を取る（F（2,386）＝3.30,P<.05）であった。

攻撃性（まじめ群：$\overline{X}$=67.71,問題行動予備群：$\overline{X}$=72.98,問題行動群：$\overline{X}$=72.81）では、

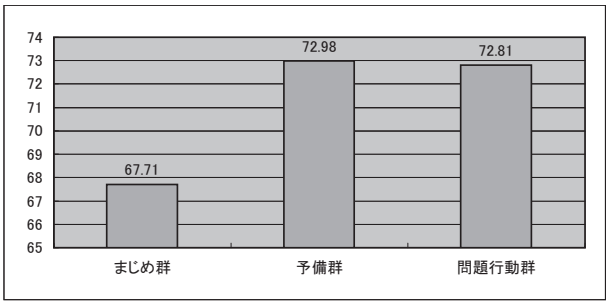

図11　　攻撃性(全体)

まじめ群の得点のみが他の２群より低く、問題行動予備群と問題行動群との間に有意な差は見られなかった。次に規範意識（まじめ群：$\overline{X}$=44.38,問題行動予備群：$\overline{X}$=40.23,問題行

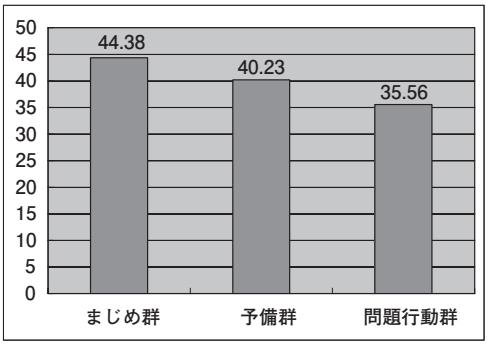

図12　規範意識（全体）

動群：$\overline{X}$=35.56）では、まじめ群＞問題行動予備群＞問題行動群と３群間に有意な差が見られた。サポートに関しては、先生のサポート（まじめ群：$\overline{X}$=13.41,問題行動予備群：

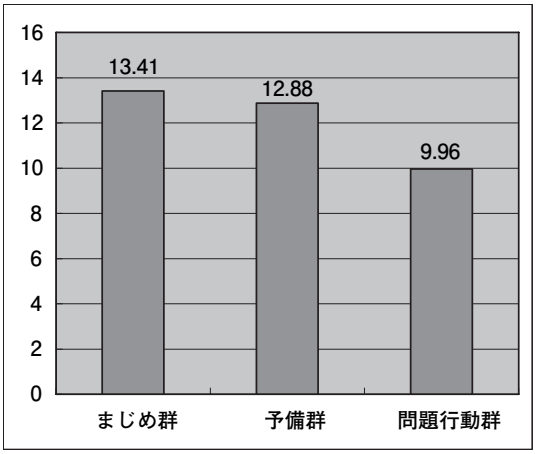

図13　先生のサポート

$\overline{X}$=12.88,問題行動群：$\overline{X}$=9.96）で、問題行動群の得点のみが低く、まじめ群・問題行動予備群＞問題行動群で差が見られた。また、朝食をとる（まじめ群：$\overline{X}$=8.39,問題行動予

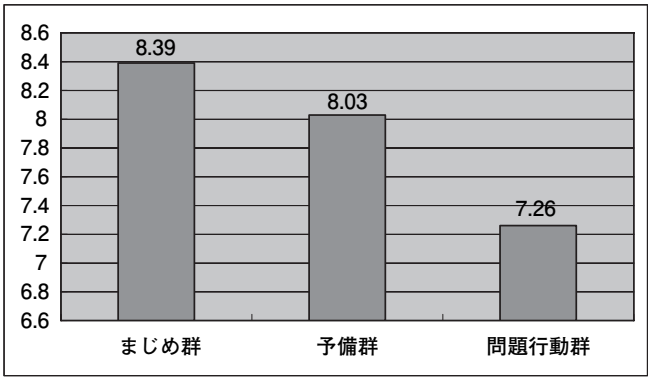

図１４　朝食をとる（全体）

備群：$\overline{X}$=8.03,問題行動群：$\overline{X}$=7.26)、でもまじめ群＞問題行動群にのみ有意な差が見られた。これらの結果は、問題行動には規範意識と攻撃性が大きく関連し、サポートの中でも先生のサポートが関連要因であることを示している。

次に男子生徒についての結果である。分散分析の結果、群間の得点差が有意であったのは、攻撃性（F（2,193）＝8.19,P<.001)、規範意識（F（2,193）＝7.35,P<.001)、先生のサポート（F（2,193）＝9.20,P<.001）であった。

攻撃性（まじめ群：$\overline{X}$=66.82,問題行動予備群：$\overline{X}$=72.21,問題行動群：$\overline{X}$=71.86）では、問題行動予備群の得点がもっとも高く、まじめ群との間にだけ有意な差が見られた。規範

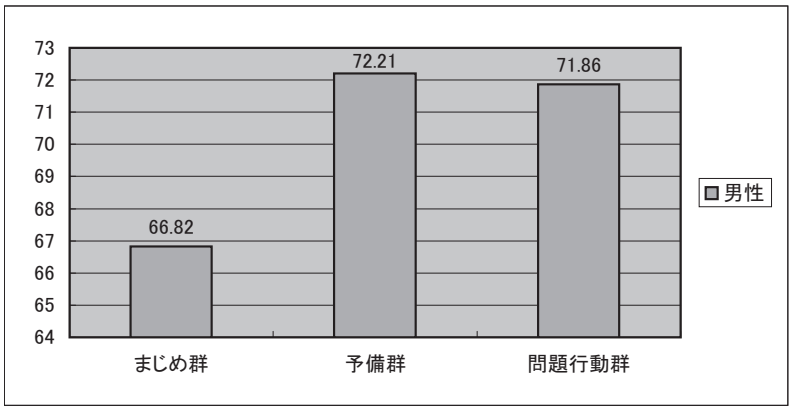

図15　攻撃性(男性)

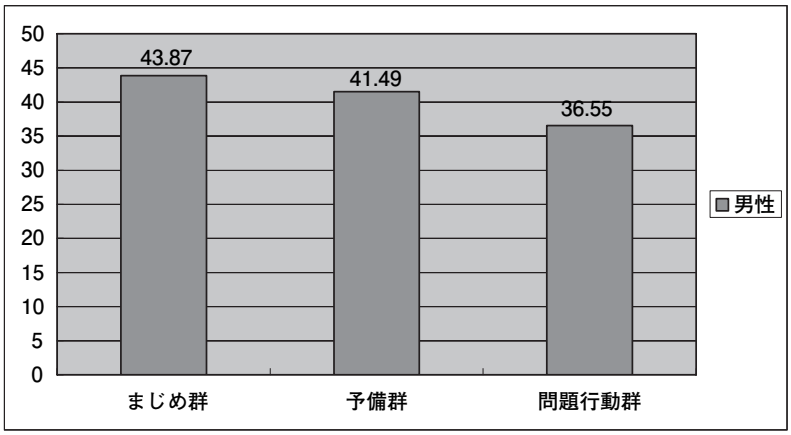

図16　規範意識（男性）

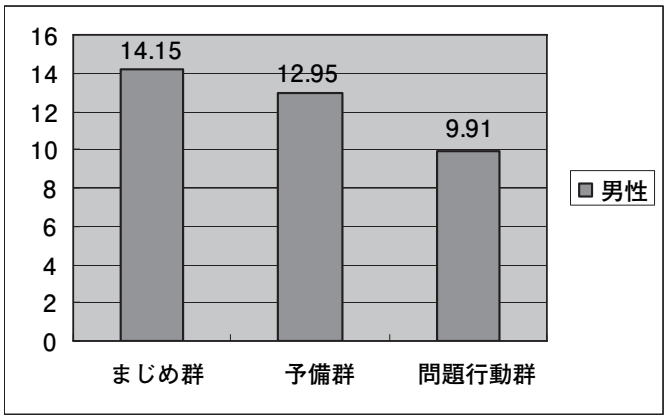

図17　先生のサポート（男性）

意識（まじめ群：$\overline{X}$=43.87,問題行動予備群：$\overline{X}$=41.49,問題行動群：$\overline{X}$=36.55）では、問題行動群の得点のみが他の２群より低く、まじめ群と問題行動予備群との間に有意な差は見られなかった。先生のサポート（まじめ群：$\overline{X}$=14.15,問題行動予備群：$\overline{X}$=12.95,問題行動群：$\overline{X}$=9.91）では、問題行動群の得点のみが低く、まじめ群・問題行動予備群＞問題行動群で差が見られた。このことは、男子生徒の問題行動予備群では先生はサポートしてくれていると認知しておりサポート効果が見られるが、問題行動群にとっては先生はあまりサポートしてくれないと認知していることを示している。また、問題行動予備群である男子生徒の場合、やってはいけないと思っていても攻撃性が高い傾向にあり、この群に対するケアの必要性を示しているといえるだろう。

次に女子生徒についての結果である。分散分析の結果、群間の得点差が有意であったのは、攻撃性（F（2,188）＝7.58,P<.001）、規範意識（F（2,188）＝19.92,P<.001）、朝食を取る（F（2,188）＝2.43,P<.10）であった。

攻撃性（まじめ群：$\overline{X}$=68.41,問題行動予備群：$\overline{X}$=73.36,問題行動群：$\overline{X}$=76.67）では、

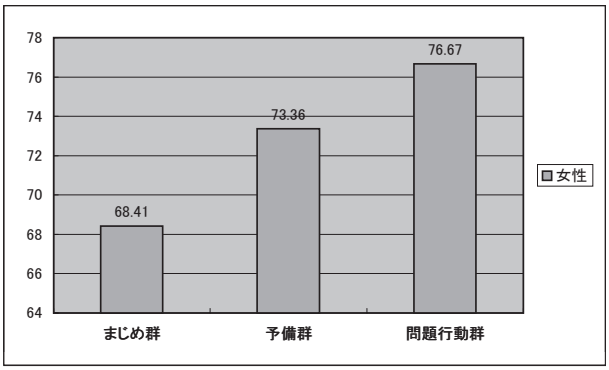

図18　攻撃性(女性)

まじめ群の得点と問題行動群との間に有意な差が認められた。規範意識（まじめ群：$\overline{X}$=44.75,問題行動予備群：$\overline{X}$=39.16,問題行動群：$\overline{X}$=34.83）では、まじめ群＞問題行動予備

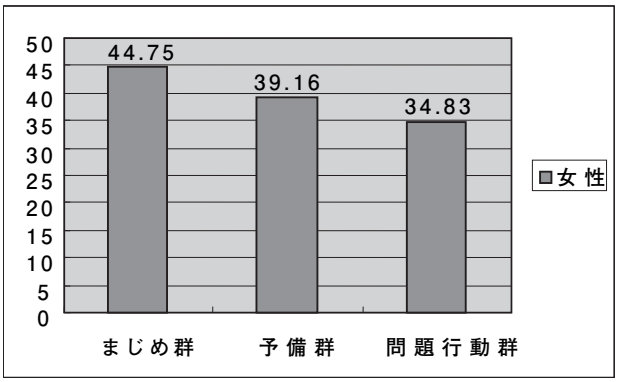

図１９　規範意識（女性）

群＞問題行動群と３群間に有意な差が見られた。サポートに関しては、先生のサポート（まじめ群：$\overline{X}$=12.84,問題行動予備群：$\overline{X}$=12.72,問題行動群：$\overline{X}$=12.17）で有意な差は見られなかった。男子生徒と比較すると、まじめ群では先生がサポートをしてくれているとあまり思っているわけでなく、問題行動群でもサポート認知が特に低いわけでもなかった。また、朝食をとる（まじめ群：$\overline{X}$=8.44,問題行動予備群：$\overline{X}$=8.11,問題行動群：$\overline{X}$=7.58）では、問題行動群での得点がまじめ群より低い傾向にあった。女子生徒の場合は、男子生徒よりも先生のサポート効果は見られず、対応の難しさを示しているとも言える。また男子生徒同様、問題行動予備群の攻撃性が高く、ケアの必要性があると考えられる。

全般的に見ると、問題行動と攻撃性、規範意識との関連は当然であろうが、先生のサポートや朝食をとるという基本的生活習慣などさまざまな要因が関連している可能性が示された。

４．考察

まず第一に、問題行動を抑制する要因として、攻撃性と規範意識が重要な要因となるということである。このことは、すぐにキレたりしないようになり、やってはいけないという意識を持続できれば問題行動を抑制・予防することができる可能性を示唆しており、その意味で攻撃性を低め規範意識を高めることが必要であると考えられる。

また、家庭における基本的な生活習慣の徹底も、問題行動の抑制につながる可能性がある。朝食をきちんととる、あいさつをキチっとすることを含め、基本的な生活習慣を身につけることが必要であることはいうまでもない。この関連で言うと、たとえばしつけの連続性については、自分の受けたしつけを自分の子どもにもしつけたいと思う生徒は、しつけに対する意識が強く、してもいいこと-いけないことの区別がつきやすいと考えられる。しかし実際は、家庭でもあいさつをきちんとすることが減り、ほとんどコミュニケーションがとれていないことも多い。しつけは学校だけにまかせるものでなく、主に家庭でしつけるものであるということを親自身がはっきり認識する必要がある。しつけの厳しさについては、約４分の３（75.2％）の生徒が家庭でのしつけが厳しくなかったと答えている。子どものいうことをきちっと聞いて受け入れることはもちろん重要なことではあるが、わがままを受け入れることと区別する必要があろう。

攻撃性に関しては、そのコントロールがポイントとなる。怒りと攻撃性については、ムカつくとキレるに置き換えて考えることができる。つまり、ムカつく段階でどれだけそれをキレることに結びつけないかということである。この点について、伊藤（2002）は、その言語化をすすめている。つまり、自分が何に対して怒っているのかをことばに表すと言うことである。これによってキレる前の段階で怒りを発散させるのである。

また、男子生徒では先生のサポートが有効であるということである。ただし、先生のサポートについては問題行動のレベルによってはサポート認知が低く、ある程度のレベルまでなら効果があると言えるだろう。

今後の課題として、問題行動、規範意識、攻撃性とそれに関連する要因について、今回分析していない個人特性や能力に関する変数（社会的スキル、外向性等）を含めて、何が

問題行動の抑制因となるのか、また、規範意識に関してもその形成に何が関連しているのか、それらに性差があるのか、また、対人関係（例えばサポート）の認知はそれらにどこまで影響するのかなど、さらに検討する必要があろう。

引用文献

1）安藤明人・曽我祥子・山崎勝之・島井哲志・嶋田洋徳・宇津木成介・大芦　治・坂井明子　1999 日本版Buss-Perry攻撃性質問紙の作成と妥当性、信頼性の検討　心理学研究　70, pp384-392.

2）法務省法務総合研究所 犯罪白書平成10年版 1998　大蔵省出版.

3）伊藤美奈子　2000 子どもの問題行動の発達的特徴とその背景にある諸要因―親の養育態度に注目して―　総務庁　低年齢少年の価値観等に関する調査　総務庁青少年対策本部　pp217-231.

4）伊藤美奈子　2002　キレと言語化　宮下一博・大野久編　キレる青少年の心　北大路書房　p82.

5）小牧一裕　1994　職務ストレッサーとメンタルヘルスに対するソーシャルサポートの効果　健康心理学研究　7（2）105-113.

6）宮戸美樹　2000　高校生による問題行動の実態と意識（1）　日本心理学会第64回大会発表論文集　p295.

7）関口　茂　2000　高校生による問題行動の実態と意識（2）　日本心理学会第64回大会発表論文集　p296.

8）清水恭子　1998　犯罪・非行に対する許容度と攻撃性格の関係　日本心理学会第62回大会発表論文集　p190.

9）総務庁青少年対策本部　1999　非行原因に関する総合的研究調査（第３回）総務庁青少年対策本部